

— さぬきマーチング委員会 —

(株式会社ミヤプロ)



- 媒体名：日本の印刷10月号/CSRマガジン「shin」第9号
- 記事タイトル：CSR認定企業のご紹介
- 内容：さぬきひとまち百景の取り組み事例紹介・CSRを推進していく今後の目標など。
- 記事のポイント：「マーチング委員会の活動が、第三者機関審査によるCSR認定の模範解答例とされている」

※CSRマガジン「shin」第9号より転載

CSR認定企業のご紹介 (第17回)

株式会社ミヤプロ

本社：香川県高松市朝日新町16-19
創業：昭和28年
従業員：27名
代表者：室野 佳昭
認定取得：平成23年6月 (ソースター)
http://www.miyapro.co.jp/



全印工連CSR推進委員会推薦の室野佳昭社長

— 宮野社長、会社の概要からお願いします。

宮野 当社は先代会長が、昭和51年に写真製版会社「ミヤプロセス」を設立しスタートしました。仕事の内容は本紙における製版～色校正が主体で、現在も売上の柱の1つです。パッケージも、とくに特色の品質に関しては厳しい注文が多いので色管理に関してはLab値やドットゲイン、濃度などを数値管理しています。もうかなり前に制作工程が変わって、アナログフィルムからデジタル時代になりましたが、15年前に印刷機とCTPを導入し、本機校正と印刷全体の仕事をしています。地方という事もあり、未だに持ち込みフィルムから印刷や印刷、デジタル変換などの依頼もありません。

CTPやAccの導入も早かったのでデジタルに強く、その技術を活用して何かできないかということから、デジタル関連のコンテンツ、ITやCT、IoT関連などの業務も幅広く請負っており、最近では人型ロボットPepperの開発ライセンスパートナー資格も取得しました。スターはWebの制作からですが、まだモチロンと言われるアナログ電話回線を使っての接続でしたが、20年くらい前のことでしょうか。アメリカのシリコンバレーを視察に行き、当時、すでにアメリカではWeb上で動画配信なども当たり前で、カルチャリングを受けました。本格的にIT事業部を立ち上げたのはそのころからです。

— 会社経営にあたり大切にしていることは何ですか。

宮野 企業理念として置いていることは、プロフェッショナルとして、お客さまに満足していただける高品質な製品づくりです。同時に特に気を使

っているのは環境に対する心掛けです。企業の果たすべき責任について、すべての利害関係者の視点に立ち、地球環境に配慮した製品づくりをしています。印刷、ITを通じて社会や世の中から必要とされる会社になるよう、マーチング委員会に参加するとともに、地域貢献にも努めています。単に売り上げを伸ばして利益を追求するだけではなく、社会と取り組むようになってきました。

— CSRに取り組むようになったきっかけは。

宮野 当初CSRという言葉の意味さえも全く理解できておらず、「CSR＝社会貢献」という偏った認識を持っていました。私が全青協の前議長をしてきた当時の議長で、横浜の所協副所長の江森亮治社長が、横浜市立大学の大影山孝弥教授を招いてセミナーを開催しました。そこで、CSRの本質と、なぜ企業にCSRが必要かを教えられ、初めて理解したわけですが、全印工連にもCSR推進委員会が設立され、私も自身もかわるようになり、また、CSRを通して企業の社会的責任について考えるようになり、社員に対して、なぜCSRが必要かを理解させる努力をすることが、経営者として大事なことでないかと思うようになりました。

— 全印工連CSR認定制度についてはどう思っていますか。

宮野 「ワンスター」の認定を取得するには、環境、品質、情報セキュリティなど全部で8つの項目があり、それをクリアする必要があります。最初はそれらの項目を見たときに、正直すぐに認定取得するのは難しいなと思いました。8つの項目の中には、これまでも積極的に取り組んでこなかったジャンルもあり、すべてをクリアするに

さぬきひとまち百景を担当する香西真由さん



はかなり時間がかかるのではないかと思いましたが、社員も今までは会社にて目的の仕事をやりっぱなしで、やりっぱなしでやるという考え方が多かったのですが、まず自分が企業の社会的責任という観点で掲げることから始め、CSRに取り組むようになりました。

— 香西さんはマーチング委員会の担当ということですが、取り組みを紹介してください。

香西 会社としてこれまで具体的にこれといった地域貢献はなかったのですが、まずは「さぬきひとまち百景」というタイトルで香川県内にある観光地のイラストを揃えて地元での使用や銀行などの、人の集まる場所に無償で展示する取り組みから始めました。それが元になり、郵便局にフレーム切手を1000シート限定で作って貰えることになり、香川県内192箇所の新設に置いてもらうこと、好評であるという声も聞かれました。また、地元での定である高松琴平電気鉄道沿線が毎年行っている「こども電車まつり」には、全国から何千人もの人が押し寄せますが、昨年はさぬきマーチング委員として参加し、レトロ電車で「ひとまち百景」の絵を展示しました。それがきっかけとなり、キーホルダーや記念切符などを、

次々と発注をいただきました。昨年11月には、「マーチングEXPO 瀬戸内」という全国大会が高松で開催され、高松丸亀町商店街の再開発にかかわった商店街の理事役と、その開発当時の雑誌編集者によるトークショーや、「こども」に乗って倉見福室まで行くオアショップなど企画を行いました。

— 環境の取り組みにも積極的に取り組んでおられますか。

鈴木 社長が地元ラジオに出演し、CSRの取り組みを説明したことがきっかけとなり、環境省の普及を促している「エコアクション21」に取り組む、20年間に認定を取得しました。

CSOの削減量を削減するために、まずは車のガソリン代や電力使用量を減らすことを考えました。ガソリン代に関しては、ハイブリッドカーへの移行、エコドライブの励行に取り組む、電力に関しては不要な照明や機器の電源を消すことに取り組み、消費電力を削減させることができました。

次に水の使用については節水を呼びかけ、少しでも削減させることができました。他にも廃棄物の削減、古紙排出量の増加、環境に配慮したグリーン商品の購入などにも取り組んでいます。

— かなり廃棄物が出るとお聞きですが、どのように削減したのですか。

鈴木 廃棄物削減では、紙は廃棄するものではなく、リサイクルできるものだという認識を徹底させました。古紙は回収してもらえらるの、増えれば増えるほど会社の利益となります。そのため、廃棄するものもリサイクルできるものゴミ箱を分けて、分別しやすくしました。また、コピー用紙の裏面の再利用、色出しの際のやし紙の再利用などにも取り組み、廃棄物を減らし、リサイクル率（古紙排出量）を増やしました。化学物質排出



環境を担当した鈴木弘子さん

量についても、廃棄削減装置を導入することにより、その量を8分の1に減らすことができました。

平成23年度は、まだ活動を行っていませんでしたが、その数値を基準として毎年1%ずつ改善できるように目標を設定しました。CO₂排出量と廃棄物発生量に関しては仕事量を左右されるため現状維持、グリーン購入量と古紙排出量は増加させるという目標を掲げました。

取り組みを始めた結果、ガソリンの使用量は、平成23年度1万6234リットル、平成24年度には1万3189リットル約19%も減らすことができました。エコドライブだけでなく、ハイブリッドカーに移行したことも大きいと思いますが、現在毎年減らすことができている。電力に関してはもデマンド装置を取り付け、見える化したところ約17%も節電できました。

廃棄物発生量に関しても、かなり数字を減らすことができている。分別を徹底し、廃棄していたものを古紙としてリサイクルさせることで、廃棄物の量を減らし、リサイクル率を増やすことに成功しました。

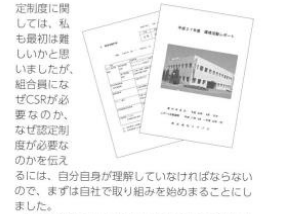
この環境活動による燃料代や電気代の削減、古紙回収料金の増加などの経費削減効果は、かなり大きいと思います。

— 他にはどのような取り組みがありますか。

宮野 毎年消防署の人に来ていただいて、消防署の取り扱い方、急病人に対する処置の仕方、心肺蘇生法、AEDの取り扱い方などの指導を受けています。30年以上に南海トラフ地震が起こる可能性は70%と言われており、会社が港湾地区にあるため、このあたりでは2階の高さくらいまで波が来ると予想されています。災害が起こったときはどこに避難すれば良いかなど、消防署の方に教えてもらいながら、近くにある合同庁舎や隣接する避難所訓練を実施しています。これまで消防避難訓練は行っていないのですが、まずは社員の身の安全を確保するための新たな取り組みとして始めました。

— 改めて全印工連の認定制度についてご意見はありますか。

宮野 CSR認定制度を立ち上げるときに、実は委員会でも賛否両論がありました。何でもかんでも認定制度にするのは違うのではないかと意見と、何かをやるためには数値や目標を決めないと成果が見えないという意見がありました。CSR認



定制度に関しては、私も最初は難しかったが、組合員も必要なのか、なぜ認定が必要なのかを伝えるには、自分自身が理解していなければならないので、まずは自らで取り組みを始めることにしました。

— CSRを推進していく上で、今後の目標はありますか。

宮野 目標ではGP認定や、全印工連CSRリーダ認定など、他業界と比べてもレベルの高い制度があるので、そうした制度には今後もチャレンジしていきたいと思っています。

BCP（事業継続計画）に関しては高い意識を持って取り組んでおりクラウドバックアップサービスも利用しています。当地区は災害時に洪水の恐れがあるので、データのバックアップは必須です。会社にとってデータは命です。たまた社屋が漏水しても、データさえ無事であれば組合員や協力会社で印刷してもらうことができます。他にもまだまだ課題は沢山ありますが今後もレベルアップをはかりたいと思っています。

